

エンカウンター・グループが 看護学生の自己理解に影響をおよぼす要因

原田慶子¹⁾, 岩崎朗子¹⁾

【要旨】 本研究は、看護学生28名のふり返し用紙をもとに、8回のエンカウンター・グループによる授業をとおして、看護学生の自己理解に影響を与える要因を分析した。

その結果、自己理解に影響を与える要因は、学生がグループに対して「信頼感をもてる」ことを基盤に、「自分を表現できた」と「メンバーについて理解した」ことであった。また、「信頼感をもてる」に影響を与えているのは、学生がグループに対して「安心できる」と「親密感をもてる」ことであった。

したがって、授業というお互いにある程度知り合っている関係の中では、親密感と学生が発言しない自由を尊重して、メンバーにとって安心できる場を保障し、信頼感が深まっていくようにすることが重要であると考えられる。

【キーワード】 授業、エンカウンター・グループ、自己理解

はじめに

看護基礎教育において対人関係形成能力を育てることは必要不可欠であり、その基盤になるのは学生の自己理解だと言われている(池田, 1997)。筆者は学生が自己理解を深めるためには、カウンセリングの考え方や方法を活用していくことが有効だと考える。その一つにエンカウンター・グループがあり、自己理解に影響を与えることはすでに多くの研究で明らかになっている。

しかし、看護基礎教育における授業としての効果に関する研究は少ない(出羽沢, 1995; 1997; 岩崎, 2003)。また、本来エンカウンター・グループのメンバーは、グループが終わって別れた後もお互いに利害関係の生じない全く知らない人同士がよいと言われている(福井, 1997)が、授業の場合はその点で限界があるといえる。

この授業における限界を踏まえて、エンカウンター・

グループの効果をより高めるためには、エンカウンター・グループの効果として認められている看護学生の自己理解に影響する要因を明らかにする必要があると考える。

そこで、本研究の目的は、授業としてのエンカウンター・グループにおける看護学生の自己理解の促進に影響を与える要因を検討することである。

なお、本研究で述べているエンカウンター・グループは、非構成的エンカウンター・グループやベーシック・エンカウンター・グループとも言われており、テーマを決めずに自由に話し合うグループ体験の場(体験内容を含む)のことである。

研究方法

1. 研究対象

A看護大学の「人間関係論・エンカウンターⅡ(選択科目)」をX年に履修した4年生及び編入2年生15

¹⁾長野県看護大学
2006年10月10日受付

名の内、承諾の得られた13名と、Y年に履修した4年生及び編入2年生26名の内、承諾の得られた15名の合計28名である。

2. データ収集

以前より授業前半のエンカウンター・グループ終了後に使用されていたふり返り用紙の1回目から8回目までの分である。ふり返り用紙の内容はグループに対して感じたこと6項目（「開放的な雰囲気がある」、「自由な雰囲気がある」、「メンバーは十分参加している」、「安心できる」、「親密感をもてる」、「信頼感をもてる」）と、グループにおける自分について6項目（「自分を表現できた」、「自由に発言できた」、「興味をもった」、「自分について理解した」、「メンバーについて理解した」、「楽しかった」）から成り立っており、「とてもある」5から「まったくない」1までの5件法である。

3. 分析方法

SPSS14.0 J for Windowsを用いて、記述統計、ウィルコクソンの符号付き順位検定、スピアマンの順位相関係数、重回帰分析を行った。

なお、ふり返り用紙は順序尺度ではあるが、心理の分野では間隔尺度とみなして分析することを了承されているため平均値の算出や重回帰分析を行った。しかし、データ数が少なく正規分布ではないため検定や相関係数は順位により行った。

4. 倫理的配慮

A看護大学倫理委員会の審査を受け、成績評価後の卒業直前に研究および公表予定の趣旨やふり返り用紙の取り扱い、研究への協力を拒否しても成績評価や今後の関係に影響しないことなどについて、文書を提示して口頭で説明し、書面で承諾を得た。なお、ふり返り用紙は毎回の氏名を書いているものではなく、8回分を一つにまとめて氏名を削除したものを授業担当者から筆者に渡してもらい使用した。

5. 授業の構成と内容

X年、Y年ともに10～11月に週1回2コマの計8回、Y年は履修希望者26名を2グループに分けて行わ

れた。1コマ目の90分は、ファシリテーター2名（X年は筆者も含まれている）を加えて円形に並べた椅子に座り、守秘義務を約束した上で事前にテーマを決めず自由に話し合うエンカウンター・グループが実施された。2コマ目90分の前半50分は、各自でふり返り用紙に記入した後、それをもとに話し合いを行い、残りの時間はグループでの体験を学びに繋げ、看護実践の場面に活用するために必要な小講義が行われた。小講義の内容は、グループ・アプローチ、グループ・プロセス、ファシリテーターの役割、ウォーミングアップ、自分を知ること、グループの企画と運営などについてであった。

結 果

1. 研究対象の属性

研究対象28名の内訳は、X年が4年生9名（その内男性1名）と編入2年生4名、Y年が4年生12名（その内男性1名）と編入2年生3名であり、合計4年生21名（その内男性2名）と編入2年生7名であった。

2. 各項目平均値の変化

1) グループに対して感じたこと

1回目の平均値が高い順に述べると、一番高かった「自由な雰囲気がある」は、1回目の3.68から4.39の間を、次に高かった「信頼感をもてる」は、1回目3.50から4.25の間を推移していた。つぎの「メンバーは十分参加している」は、1回目の3.46から4.00の間で推移していた。1回目は平均値が同じ3.21であった「開放的な雰囲気がある」は、2回目以降3.89から4.36の間を、「親密感をもてる」は3.64から4.32の間を推移していた。1回目の平均値が3.18と低かった「安心できる」は、2回目以降3.57から4.29の間を推移していた(表1)。

ここで1回目を0点として8回目までの平均値の差の変化をみてみると、「開放的な雰囲気がある」、「安心できる」、「親密感をもてる」の3項目に大きな変化がみられた。また1回目と8回目とを比較して平均値の差が大きかったのは、「安心できる」と「親密感をもてる」が1.11であった。つぎに「開放的な雰囲気がある」1.04、「信頼感をもてる」0.75、「自由な雰囲気が

表1 各回の平均値 (n = 28)

項目\回		1	2	3	4	5	6	7	8
グループに対して	開放的な雰囲気がある	3.21	3.89	4.19	4.36	4.11	4.00	3.96	4.25
	自由な雰囲気がある	3.68	4.00	4.22	4.20	4.14	4.26	3.96	4.39
	メンバーは十分参加している	3.46	3.43	3.63	4.00	3.71	3.65	3.71	3.68
	安心できる	3.18	3.57	3.74	4.04	4.00	4.07	4.04	4.29
	親密感をもてる	3.21	3.64	3.89	4.16	4.00	3.96	4.08	4.32
	信頼感をもてる	3.50	3.64	3.78	4.00	3.86	4.19	4.17	4.25
グループであなたは	自分を表現できた	3.18	3.50	3.33	3.52	3.61	3.41	3.58	3.64
	自由に発言できた	3.29	3.32	3.56	3.76	3.89	3.70	3.54	3.79
	興味をもった	4.11	4.21	4.04	4.16	4.21	4.07	4.17	4.21
	自分について理解した	2.71	3.39	3.52	3.60	3.64	3.52	3.58	3.71
	メンバーについて理解した	3.18	3.86	3.81	3.92	3.93	4.00	4.08	4.00
	楽しかった	3.82	4.04	4.04	4.24	4.29	3.93	4.00	4.18

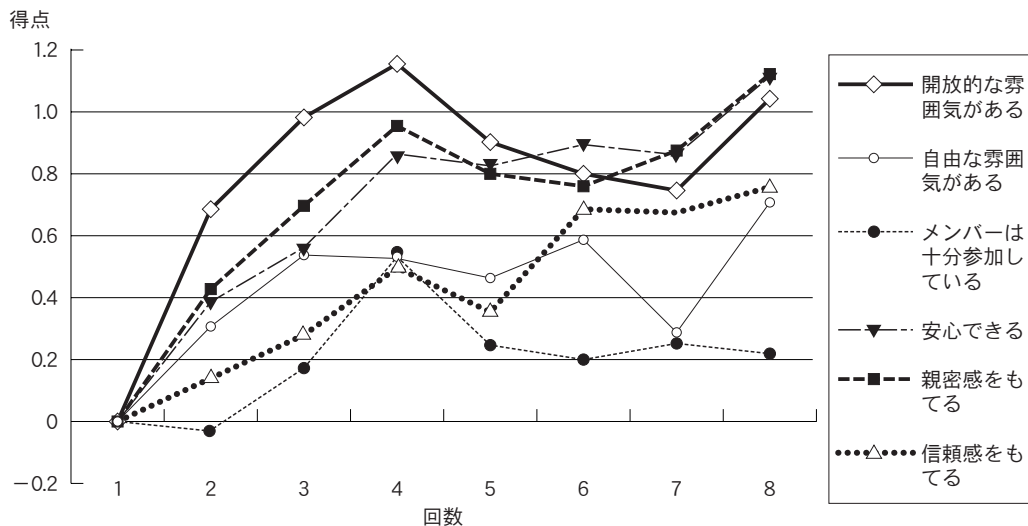


図1 グループに対する各項目の平均値

ある」0.71であり、「メンバーは十分参加している」はわずか0.22の差であった(図1)。そして1回目と8回目を対応させた順位検定では、「メンバーは十分参加している」を除いた残り5項目において有意水準1%で差がみられた。

2) 自分について

1回目の平均値が高い順に述べると、「興味をもった」が1回目4.11から4.21の間、「楽しかった」は1回目3.82から4.29の間を推移していた。次いで「自由に発言できた」は1回目3.29から3.89の間を推移し、1回目同じ3.18の「自分を表現できた」は2回目以降3.33から3.61の間、「メンバーについて理解した」は2回目以降3.81から4.08の間を推移していた。1回目が

全項目中一番低い2.71の「自分について理解した」は、2回目以降3.39から3.64の間を推移し、8回目は3.71であった(表1)。

ここで1回目を0点として8回目までの平均値の差の変化をみてみると、「自分について理解した」と「メンバーについて理解した」の2項目に大きな変化がみられた。また1回目と8回目を比較して平均値の差が大きかったのは、「自分について理解した」1.00であり、つぎに「メンバーについて理解した」0.82、「自由に発言できた」0.50、「自分を表現できた」0.46、「楽しかった」0.36であった。「興味をもった」は0.10でほとんど差が無かった(図2)。1回目と8回目を対応させた順位検定では、「自分を表現できた」は有意

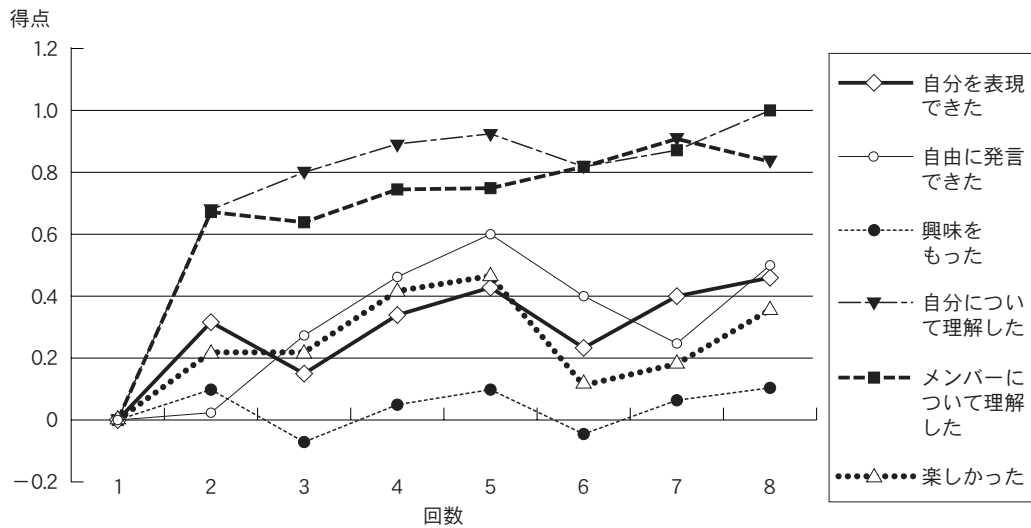


図2 グループにおける自分に対する各項目の平均値の差

表2 各回の自己理解と他の項目との有意性のある相関係数(r s)

項目/回 (自己理解)	1	2	3	4	5	6	7	8
開放的な雰囲気がある							0.466*	0.446*
自由な雰囲気がある					0.391*		0.573**	0.502**
メンバーは十分参加している	0.379*						0.510*	
安心できる				0.633**		0.503**		
親密感をもてる	0.391*		0.421*	0.469*				0.407*
信頼感をもてる	0.547**	0.556**	0.436*	0.514**		0.410*	0.435*	0.508**
自分を表現できた		0.621**	0.392*	0.468*	0.514**	0.566**	0.685**	0.505**
自由に発言できた		0.532**		0.456*	0.498**	0.477*	0.479**	
興味をもった		0.570**				0.472*	0.386*	
メンバーについて理解した				0.464*	0.754**	0.795**	0.570**	
楽しかった						0.445*	0.408*	

*: <.050 **: <.010

表3 各回の自己理解を従属変数とした重回帰分析による有意性のある標準偏回帰係数(β)

独立変数/回	1	2	3	4	5	6	7	8
開放的な雰囲気がある		0.437**						
安心できる				0.519**				
信頼感をもてる	0.479**	0.294*	0.486*					
自分を表現できた		0.551**			0.335**	0.628**	0.569**	
興味をもった	0.435**	0.286*						
メンバーについて理解した				0.490*	0.628**		0.631**	

*: <.050 **: <.010

表4 各回の信頼感を従属変数とした重回帰分析による有意性のある標準偏回帰係数(β)

独立変数/回	1	2	3	4	5	6	7	8
開放的な雰囲気がある								
自由な雰囲気がある	0.487*							
メンバーは十分参加している								
安心できる		0.423*	0.347*	0.542**		0.524**		
親密感をもてる			0.504**	0.369*	0.612**		0.516*	0.593**

*: <.050 **: <.010

水準5%で、「自分について理解した」と「メンバーについて理解した」は有意水準1%で差が認められた。

3. 自己理解と他の項目との関連

「自分について理解した」とその他の項目との間において、有意水準1%で正の相関関係が認められたのは、1回目「信頼感をもてる」、2回目「信頼感をもてる」、「自分を表現できた」、「自由に発言できた」、「興味をもった」の4項目であった。3回目はなく、4回目では「安心できる」と「信頼感をもてる」、5回目では「自分を表現できた」と「メンバーについて理解した」の各2項目であった。6回目は「安心できる」、「自分を表現できた」、「自由に発言できた」、7回目は「自由な雰囲気がある」、「自分を表現できた」、「メンバーについて理解した」の各3項目、8回目は「自由な雰囲気がある」、「信頼感をもてる」、「自分を表現できた」、「自由に発言できた」、「メンバーについて理解した」の5項目であった(表2)。回を重ねるにつれて有意差のある項目が増えてきており、各回の「自分について理解した」との関連回数の多い項目は、「信頼感をもてる」と「自分を表現できた」が7回、「自由に発言できた」が5回、「メンバーについて理解した」が4回であった。

また、回帰式の有効性および多重共線性の検討を踏まえて「自分について理解した」を従属変数、他の項目を独立変数としてステップワイズ法(変数選択基準はF値=2)による重回帰分析を行った結果、有意に影響力の強い項目として3回以上認められたのは、1, 2, 3回目の「信頼感をもてる」と2, 5, 6, 7回目の「自分を表現できた」、4, 5, 7回目の「メンバーについて理解した」であった(表3)。

最初の3回目までの「自分について理解した」に影響を与えている「信頼感をもてる」は、学生がグループに対して感じたことである。そこで、グループに対して感じたことに含まれる他の項目との関係を知るために、「信頼感をもてる」を従属変数、他の5項目を独立変数として重回帰分析を行った結果、有意に影響力の強い項目は「安心できる」と「親密感をもてる」の2項目であった(表4)。

考 察

エンカウンター・グループが学生の自己理解の促進に影響があることは、先行研究によりすでに報告されているが、本研究のエンカウンター・グループにおいても同様の結果が確認された。

星野(2003)はエンカウンター・グループなどの体験学習におけるファシリテーターの行動基準として、①相手中心であること、②個の尊重、③非評価の姿勢、④非操作、⑤ともにあること、が重要であると述べている。この考えを踏まえると、学生の「自分について理解した(自己理解)」に影響をおよぼす要因としては、学生にとって安全な場の保障がなされる必要があるといえる。本研究では、学生がグループに対して感じた「安心できる」、「開放的な雰囲気がある」、「親密感をもてる」の平均値において1.00以上の上昇を示したことから、そのような場はある程度確保されていたと考えられる。また、重回帰分析の結果から、グループに対して「信頼感をもてる」が、「安心できる」と「親密感をもてる」の影響を受けていることから、授業の限界であった“お互いにある程度知り合っている”ことは、むしろグループに対して「親密感をもてる」ことであり、プラスに作用しているともいえる。

各回の「自分について理解した(自己理解)」に対する他の項目との相関関係の結果からは、関連回数の多い「信頼感をもてる」、「自分を表現できた」、「自由に発言できた」、「メンバーについて理解した」の4項目が影響を与えていると推察できる。そして、重回帰分析の結果から、グループに対する「信頼感をもてる」を基盤に「自分を表現できた」と「メンバーについて理解した」ことが、学生の自己理解に影響を及ぼしていた。小柳(1999)はエンカウンター・グループの現代的意義の一つに「自分を表現し人から反応をもらう場として機能する」と述べている。学生が発言できた、できなかったにかかわらず、何らかの形で「自分を表現できた」ことが、同じく小柳(1999)のいう「自分を表現する行為を通じて自らを独自のかけがえのない存在という認識を強めていく」ことによって自己理解を促進すると考えられる。また「メンバーについて理解した」ことが自己理解に影響することについては、

原田 (2005) が自分をわかっていくプロセスの中で同様のことを述べており、他者理解が自己理解を促進すると考えられ、この点が個別のカウンセリングとは異なるエンカウンター・グループの特徴といえる。

したがって、エンカウンター・グループを授業として実施していく上では、エンカウンター・グループの特徴を十分活用していくことが必要である。そのためには、むしろ授業として行う場合の限界である“お互いにある程度知り合っている”ことを生かして、メンバーにとって安心できる場を保障し、信頼感が深まっていくようにしていくことが重要であるといえる。

しかしながら、今回のふり返り用紙の中で「メンバーは十分参加している」は、平均値が低く推移しており、「自分について理解した」を含め他の項目の影響要因にならなかったことについて考えてみると、学生は「グループで話し合うこと＝問題解決型のグループワーク」とイメージしており、最初はテーマを決めず話し合うことに戸惑いもあり、「発言すること＝参加していること」という認識をなかなか変えられなかったからだと推察できる。一般にエンカウンター・グループにおいては、発言しない・したくない自分を表現することも尊重されているわけで、そのような学生の思いを受け入れて表現できるようにし、「発言すること・発言しないこと＝参加していること」にしていくことが、授業として行う場合には特に重要だと考える。

結 論

エンカウンター・グループによる授業において、看護学生の自己理解に影響を与える要因は、グループに対して「信頼感をもてる」ことを基盤に「自分を表現できた」と「メンバーについて理解した」ことである。また、「信頼感をもてる」に影響を与えているのは、学生がグループに対して「安心できる」と「親密感をもてる」ことである。

したがって、エンカウンター・グループを授業として実施し、看護学生の自己理解を促進するためには、授業ならではの“お互いにある程度知り合っている”ことを生かして安心できる場を保障し、グループへの

信頼感を深めて自分を表現できるようにしていくことが重要である。

謝辞および付記

本研究にご協力いただいた、卒業生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は平成15-18年度長野県看護大学特別研究助成金を受けての課題研究の一部である。

文 献

- 出羽澤由美子 (1995)：看護教育における自己・他者理解を促す教授法の研究. 日本看護科学会誌, 15(3): 63.
- 出羽澤由美子 (1997)：看護学教育における自己・他者理解を促す教授法の時系列的研究. 日本赤十字看護大学紀要, (11)：12-21.
- 福井康之 (1997)：人間関係が楽しくなるエンカウンター・グループへの招待. 新水社, 東京.
- 原田慶子 (2005)：学生が自分を理解していくプロセス. 日本看護学教育学会誌, 14 (3)：1-8.
- 星野欣也 (2003)：ファシリテーターは援助促進者である. 津村俊充, 石田裕久編, ファシリテーター・トレーニング 自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ. 7-11, ナカニシヤ出版, 京都.
- 池田紀子 (1997)：看護学生のコミュニケーション理解のための授業. 飯田澄美子, 見藤隆子編, 看護カウンセリング. 165-173, 医歯薬出版, 東京.
- 岩崎朗子, 池田紀子 (2003)：授業の中のエンカウンター・グループの効果. 日本看護学教育学会第13回学術集会講演集, 222.
- 小柳春生 (1999)：エンカウンター・グループの現代的意義. 野島一彦編, グループ・アプローチ 現代のエスプリ385. 187-195, 至文堂, 東京.

【Summary】

Factors in Encounter Groups that Influence Nursing Student's Self-Understanding

Keiko HARADA¹⁾, Akiko IWASAKI¹⁾

¹⁾ Nagano College of Nursing

In this study, the researchers analyzed the factors that influence nursing student's self-understanding within an encounter group. Evaluation sheets were given to 28 nursing students.

As a result, the factors influencing nursing student's self-understanding basically included a "feeling of trust" of the group, followed by the "ability to express one's self" and a "growing understanding of the other members." The two items that influenced the "feeling of trust" were "a sense of security" and "friendliness."

Therefore, in classroom lessons where the participants know each other to some degree, the role of the facilitator is to respect friendliness and nursing student's wishes not to speak, to secure a safe and free space for all members, and to promote an atmosphere of trust.

Keywords: classroom lesson, encounter group, self-understanding

原田慶子 (はらだ けいこ)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
Tel & Fax : 0265-81-5153
Keiko HARADA
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: harada@nagano-nurs.ac.jp